

令和元年6月13日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01563

研究課題名(和文) ライフレビューシートとメモリースライドを用いた回想法に関する研究

研究課題名(英文) A study of an individual reminiscence therapy using Life Review Sheet and Memory slide

研究代表者

浅野 朝秋 (Asano, Tomoaki)

秋田大学・医学系研究科・准教授

研究者番号：30550537

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：認知症の方々を対象とした個別回想療法のツールとしての「人生のアルバム」を作成するためのインタビューガイドを開発した。このガイドを使うことで、臨床経験が浅いスタッフでも、ある程度進行した認知症の方からアルバム作成に必要な情報収集が可能になることが確認された。

また得られた情報を用いて伝統的な紙版とデジタル版の2種類のアルバムを作成し、それを用いて個別回想療法を4週間実施した。結果、焦燥感に関連する行動心理症状と、重度者における介護負担度の軽減が期待できる知見を得た。加えて、デジタル版の方が、重度の方に対する介護負担度がやや軽減することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

デジタルツールを含む「人生のアルバム」を用いた個別回想療法が、重度の認知症の方においても介護負担度の軽減効果を示したことは、新しい知見である。

また本研究では、アルバム作成に必要な情報を効率的に収集するための「インタビューガイド」を開発した。これによりアルバム作成に対する障壁が少なくなることが期待できる。このようなアルバムは、回想療法のツールとして活用できるに留まらず、各スタッフ間で認知症を抱えるご本人の背景や価値観に関する情報共有が促進されることを意味する。すなわち、ご本人の尊厳を重視するパーソンセンタードケアに基づく「認知症になっても安心できる社会」の実現の一助となる意義がある。

研究成果の概要(英文)： We developed an interview guide to create a Life Story Book as a tool for individual reminiscence therapy for people with dementia. This guide has made it possible, to some extent, to collect information from people with advanced dementia who were difficult for staff with little clinical experience.

And then, we implemented individual reminiscence therapy for 4 weeks with the traditional paper version and the digital version using the collected information. As a result, we found that we could expect reduction of a sense of irritation related to behavioral psychotic symptoms and care burden of the care staff as an effect of individual reminiscence therapy in people with severe dementia. In addition, it was suggested that the digital version would reduce a little bit more than traditional one the burden of care staff toward for the person with severe dementia.

研究分野：作業療法

キーワード：回想法 ライフストーリーブック 認知症 ライフレビュー

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 回想療法は、認知症者においても比較的保たれやすい長期記憶や手続き記憶を利用して、過去の再体験を図り、自尊心の回復や周囲からの承認・称賛を得ることで、情緒的側面を安定化し行動心理症状の軽減を図るものとされる<sup>1)</sup>。その効果的な実行のためには、対象者の生活歴を考慮し、陽性感情を想起するような題材を選択する必要がある。しかし認知症の進行につれて、認知症者は徐々に自らの言葉で自発的に表出することが困難になる。したがって対象者が重度であるほど、スタッフ側が、対象者にふさわしい題材を探索し発見する必要性が高くなる。そのような題材を成功裡に得るには、対象者の生きてきた時代背景に関する知識を十分に有することや、期待した反応が得られなかった場合に臨機応変に聞き方を変更するなど、回想法を実施するスタッフの、知識や問いかけに関する技量が大きく関わることが予想される。しかし、認知症高齢者に関わるケアスタッフやリハビリテーションスタッフには、比較的若年者が多いことから、そのような題材にたどり着くのは容易ではないことが予想される。

一方で、高齢者の自伝的記憶に関しては、十代から三十代に想起が偏ることが知られている<sup>2)</sup>。このことから、対象者の若い頃に関するキーワードリストや、質問技法などを組み込んだインタビューガイドを作成し、それをを用いてその時期の生活に関するインタビュー(Life Review)をおこなうことで、回想療法の熟達度にあまり依存せずに、回想に必要な情報収集が可能になることが予想される。しかし、これに関連する報告は存在しない。

(2) 回想療法の効果に関しては、各種 Meta-analysis において、認知機能には小規模な効果、うつ症状には中程度の効果を有することが報告<sup>3) 4)</sup>されている。しかし重度の対象者を含む研究は非常に少なく<sup>5)</sup>、重度者に与える影響は不明である。

(3) また、Person Centered Care の観点からも、対象者から生活歴を聴取し、その情報を「人生のアルバム(Life History Book)」としてまとめ、それをを用いて介入することは有望と報告<sup>6)</sup>されている。この Life Story Book に関して、最近ではデジタル版(Memory Slide, Digital Story Book)を用いた報告<sup>7)</sup>も出現してきている。しかしデジタル版と従来の紙版のどちらが効果的なのかは、まだ報告がないのが現状である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3点である。

- (1) 臨床経験が浅いスタッフでも認知症者から十分に語りを引き出すことを可能にする Life Review 用インタビューガイドの開発
- (2) インタビューで得られた情報を用いて、個別に回想療法を実施した際の効果検証、とりわけ、重度者に対する影響に関しての知見を得ること。
- (3) 回想療法の題材として用いる Life Story Book に関して、デジタル版と従来の紙版のそれぞれの特徴に関して知見を得ること。

## 3. 研究の方法

### (1) Life Review 用インタビューガイドの開発と評価

回想療法および認知症者との交流に熟達していない者として、作業療法学生を設定した。研究代表者が作成したインタビューガイドの暫定版を用いて、2016 年下期に研究代表者が勤務する作業療法学生 2 名の協力を得て、パイロットインタビューを認知症高齢者 4 名に対して試行した。その結果を受けて、対象者の年代にあわせてキーワードリストや時代背景説明を調整した 5 種類のインタビューガイドを 2017 年 3 月に作成した。

インタビューガイドの効果指標としては、30 分間あたりの対象者の言語表出量を用いた。インタビューは、条件 A (インタビューガイドを使用しない場合)、条件 B (インタビューガイドを使用した場合)、条件 C (対象者をよく知るスタッフがインタビューガイドを使用しない場合) の 3 条件で実施した。尚、各作業療法学生は対象者とは初対面の者に統制した。表出量の算定は、インタビュー内容を録音したものを逐語録に起こしてテキストデータ化したものを、日本語形態素解析システムに投入して得られた語数とした。その際に方言は標準語に変換した。インタビューは 36 名の認知症高齢者に対して、各 30 分間 3 回、合計 108 回実施された。

### (2) Life Story Book(Memory Slide)の効果判定

本研究の適合基準は、認知症の診断があり、他の精神疾患に罹患しておらず、簡単な日常会話が可能であることとした。研究に協力が得られた 9 介護保険施設の利用者で、この条件に適合し研究に同意が得られた方のうち、ご家族又はご本人より写真等の提供を見込める方 36 名を実験群とし、それ以外の定期的に評価を継続していた 29 名を対照群とした。

実験群に関しては、初期評価(T1)として認知機能評価(MMSE/HDS-R)を実施後、10 週間に 3 回のライフレビューセッションを持ちこの期間終了後(T2)に、認知機能評価および ADL 評価(N-ADL)、意欲の評価(V-IDX)、行動心理症状及び介護負担感評価(NPI-NH)を実施した。次いで 2 週間後の Life Story Book 介入直前(T3)に N-ADL、V-IDX、NPI-NH を再評価した。

ライフレビューで繰り返し語られた内容を中心に、提供された写真およびインターネット等から収集した写真を用いて PowerPoint2013 でスライドを作成した。スライド枚数は全部

で 21 枚に統一し、各ページには短い文章で説明文を付けた。このファイルを 2L 版に印刷してアルバムにまとめたものを紙版とした。また同ファイルを動画に変換し、一部ページに効果音を付加し 7inch TABLET PC にインストールしたものをデジタル版とした。

介入期間は紙版およびデジタル版共に 2 週間ずつとし、合計 4 週間行った。介入は、ケアまたはリハビリテーションスタッフが、一週間に 5 回 10 分程度、一緒にアルバムを見て個別に関わった。中間のアルバム切り替え時点(T4)で N-ADL, V-IDX, NPI-NH を再評価し、一連の介入が終了した時点 (T5) で、N-ADL, V-IDX, NPI-NH に加えて MMSE/HDS-R を再評価した。一連の介入終了 3 か月後(T6)に、MMSE/HDS-R および N-ADL, V-IDX, NPI-NH を最終評価した。

対照群に関しては、初期評価時点(T1)と 6 か月後経過時点(T6)に、MMSE/HDS-R および N-ADL, V-IDX, NPI-NH の評価を実施した(表 1)。

### (3) Life Story Book の紙版とデジタル版の効果比較

実験群において 2 週間ずつアルバムを切り替えて使用する際、紙版から開始する群とデジタル版から開始する群にランダムに割り付けを行い、クロスオーバーデザインを用いて、介入 2 週前 (T2)、介入直前 (T3)、アルバム切り替え時点 (T4)、介入終了後 (T5) の 4 時点における N-ADL, V-IDX, NPI-NH の得点を比較した。

表 1 各種評価指標と評価時期

	初期評価 (T1)	介入 2 週前 (T2)	介入直前 (T3)	介入 2 後 (T4)	介入 4W 後 (T5)	初期～半年後 (T6)
実験群 (n=36)	認知機能 (MMSE/HDS-R)	認知機能, ADL(N-ADL), 意欲(V-IDX) 行動心理症状 (NPI-NH)	ADL, 意欲, 行動心理症状	ADL, 意欲, 行動心理症状	認知機能 ADL, 意欲, 行動心理症状	認知機能 ADL, 意欲, 行動心理症状
対照群 (n=29)	認知機能 ADL(N-ADL) 意欲 (V-IDX)					認知機能 ADL(N-ADL) 意欲(V-IDX)

## 4. 研究成果

### (1) Life Review 用インタビューガイドの有用性

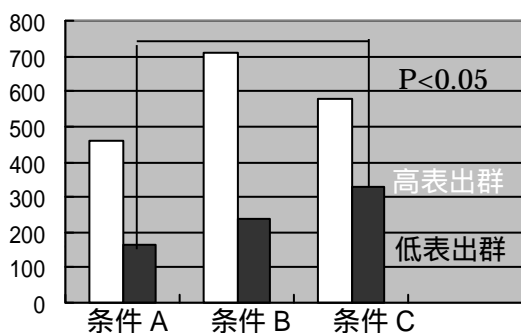


図 1 ライフレビュー時平均総表出語数

被験者 36 名を 30 分間の表出語数の中央値で、高表出群と低表出群に分類し、条件 A(学生・ガイド無し)、条件 B(学生・ガイド有り)、条件 C(スタッフ・ガイド無し)による表出語数の差を比較した。結果、低表出群の場合は、ガイドが無いと有意に表出語数が少なかった。しかし本ガイドを用いた場合に、有意差はなかった。このことから、今回開発したインタビューガイドは、低表出群に対しては、ある程度有効だったことが示された(図 1)。

### (2) Life Story Book(Memory Slide)を用いた個別回想療法の有効性

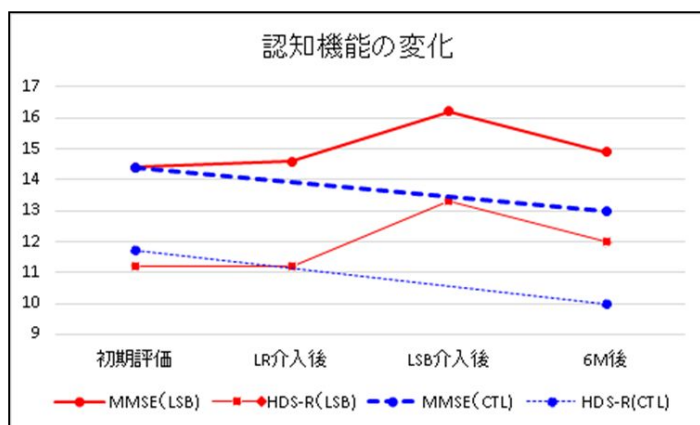
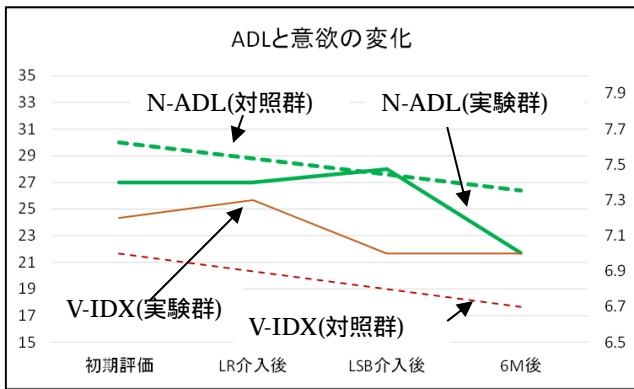


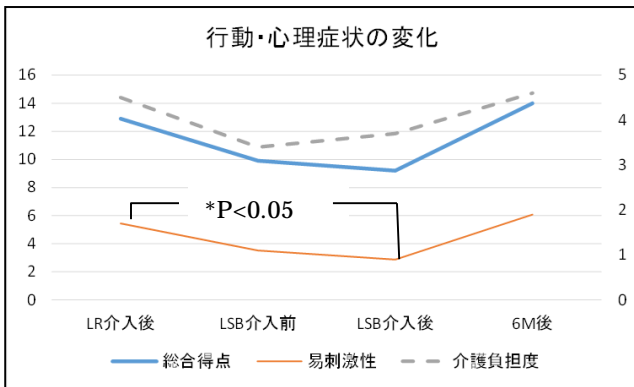
図 2 LR(Life Review), LSB 介入前後の HDS-R/MMSE 得点

対照群の認知機能は半年後に有意に低下したのに対し、実験群の認知機能は保たれていた。重症度別には、軽度者～中等度者までは、認知機能は Life Story Book 介入直後には、有意に数点程度の改善がみられ、軽度者は介入終了後 3 か月経過した時点でも維持されていた。重度者に関しては、介入による改善は見られなかったが、有意な低下は見られなかった。下位項目では語の流暢性が改善していた(図 2)。



ADL(N-ADL)に関して対照群では6か月後には有意な低下が見られた。この傾向は重度者で顕著だった。一方、実験群は個人差が大きかったが、介入期間中の有意な低下は無かった。対照群の下位項目では食事が低下していた。意欲(V-IDX)に関しては、対照群の重度者において有意に低下したが、実験群では介入期間中の低下は無かった。(図3)

図3 N-ADL/V-IDX 得点の時系列変化 ( 実験群は介入二週間前をベースラインとする )



実験群の行動心理症状は、総合得点では有意差は無かったが、介入期間中はやや減少傾向だった。下位項目では易刺激性が Life Story Book 介入後には有意に低下していた。また介護負担度に関しては、重度者においては、介入 2 週間前(LR 介入後)に比べて、介入前および介入後に有意な低下が見られた(図4)。

図4 NPI-NH 得点の時系列変化

被験者全体における今回の結果は、概ね各種先行 Meta-analysis<sup>3)4)8)9)</sup>に一致していた。重度者における知見として、認知機能や ADL および意欲の改善は困難だが、それらの低下を遅延あるいは機能を維持させる効果が期待できることが示唆された。また介護負担度の低下は重度者にみられ、しかも Life Story Book による介入に先行して出現する可能性が示唆された。

( 3 ) 紙版とデジタル版 Life Story Book の比較

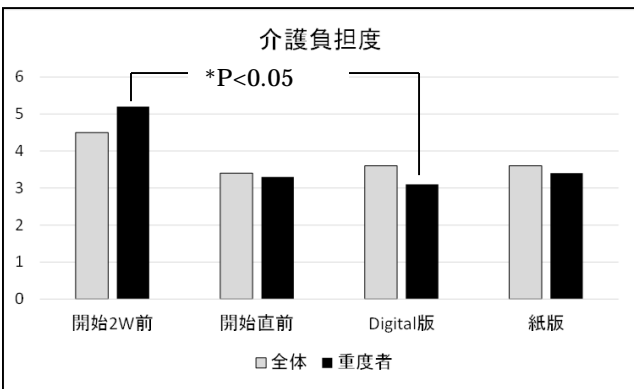


図5 介護負担度の条件毎比較

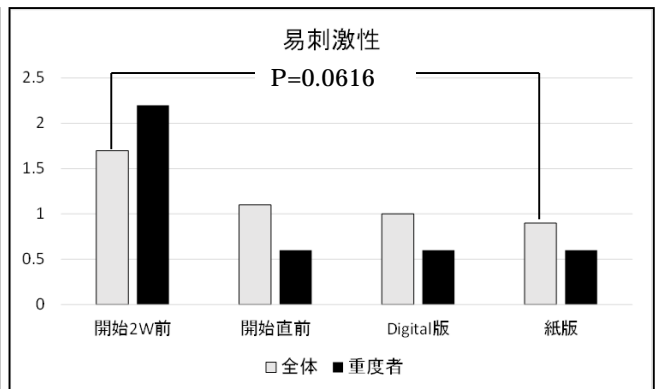


図6 易刺激性(Irritability)の条件間比較

介護負担度に関しては、重度者において Digital 版終了時が開始 2 週間前に比べて、有意に低下していた。また易刺激性に関しては、対象者全体として、開始 2 週間前に比べて紙版終了時に低下する傾向がみられた(図5, 図6)。

結論として、対象者に対する質問を 10~30 代に焦点化し、その時代背景解説、キーワードリスト、質問の仕方をまとめたインタビューガイドは、認知症が進行した方に対して、臨床経験が浅い者がインタビューする際に有用であることが認められた。また、インタビュー結果をまとめた Life Story Book を用いて個別に関わることは、軽度から中等度者における若干の認知機能改善および重度者における介護負担度軽減が期待できることが示唆された。さらに、紙版とデジタル版の比較においては、重度者においては介護負担度に関してややデジタル版の方が有利な可能性が示唆された。これがデジタル版のマルチメディア性によるものか、スタッフの働きかけやすさによるものかは、今後の研究課題である。また対象者との共作プロセスが無くとも、回想療法効果が期待できる先行報告<sup>6)</sup>を、本研究結果は支持したと言える。

## <引用文献>

- 1) 福原藍加, 山田達夫: 認知症の非薬物療法とその EBM 各論. 認知症学下巻, 日本臨床社, 2011, p112.
- 2) 槇洋一, 仲真紀子: 高齢者の自伝的記憶に於けるバンプと記憶内容. 心理学研究 Vol.77(4): 333-341, 2006.
- 3) Cotelli M, Manenti R, Zanetti O: Reminiscence therapy in dementia: a review. Maturitas 72(3): 203-205. 2012
- 4) Subramaniam P, Woods B: The Impact of individual reminiscence therapy for people with dementia: systematic review. Expert Review of Neurotherapeutics 12(5): 545-555. 2012
- 5) Nakamae T, Yotsumoto K et al: Effects of Productive Activities with Reminiscence in occupational therapy for people with dementia. Hong Kong Journal of Occupational Therapy 24: 13-19. 2014
- 6) Subramaniam P, Woods B: Life Review and life story books for people with mild to moderate dementia. Aging and Mental Health 18(3): 363-375. 2012
- 7) Hashim H, Rias M et al.: The use of personalized digital memory book as a reminiscence therapy for Alzheimer's disease patients. International Visual Informatics Conference. 508-515. 2013
- 8) Woods B, O'Philibin L et al.: Reminiscence therapy for dementia. Cochran Database of Systematic Reviews. 2018
- 9) Elfrink R, Zuidema U. et al.: Life story books for people with dementia: a systematic review. International Psychogeriatrics 30(2): 1797-1811. 2018

## 5. 主な発表論文等

### [雑誌論文](計 1 件)

- (1) 浅野朝秋, 認知症高齢者におけるライフレビュー時の発話量と「語の流暢性」の関係. 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要, 査読有, 第 26 巻 2 号, 2018, 13-19. doi/10.20569/00003677

### [学会発表](計 4 件)

- (1) 浅野朝秋, 津軽谷恵, 王治文, 石川隆志. TABLET 端末と紙媒体の Life History Book を併用した個別回想療法の効果. 第 20 回日本認知症ケア学会, 2019.
- (2) 浅野朝秋, 王治文. 認知症高齢者へのライフレビューにおけるガイド付きインタビューシートの有用性の検討. 第 52 回日本作業療法学会, 2018.
- (3) 浅野朝秋, 津軽谷恵, 王治文, 石川隆志. 時代背景に関する解説と質問キーワードを例示したインタビューシートの有用性検討. 第 19 回日本認知症ケア学会, 2018.
- (4) 浅野朝秋, 津軽谷恵, 王治文, 石川隆志. 時代背景を事前学習することにより認知症高齢者の語りを増やす試み. 第 18 回日本認知症ケア学会, 2017.

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名: 津軽谷 恵

ローマ字氏名: Tsugaruya Megumi

所属研究機関名: 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻

部局名: 作業療法学講座

職名: 助教

研究者番号 (8 桁): 50333943

研究分担者氏名: 王 治文

ローマ字氏名: Wang Chuen

所属研究機関名: 東北文化学園大学医療福祉学部

部局名: リハビリテーション学科

職名: 准教授

研究者番号 (8 桁): 60382694

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。